

#### 4. 絵本を読む時間

先生の口から語られるお話は、テレビ以上に、子供を引着ける力を持っている、と私は思っています。

子供の心の動きに関係なく、どんどんと進められていくテレビ物語よりも、子供と問答を交えながら、子供の心の動きを掴みながら進めていくことの出来る“生”のお話は、子供にとって楽しくないはずがありません。

子供の反応を窺いながら、子供の、ともすれば外れようとする心を、話に引張込む努力をして、お話を進めていくことは、大変なことではありますが、それだけにやり甲斐のある仕事だと思います。

また、お話の種がすぐ尽きてしまって困る、という嘆きもよく聞きます。これは、“話の接木”をなさったらいかがでしょうか。

その一例として、一寸法師を挑太郎に“接木”した、“一寸柿子”のお話を紹介しましょう。

昔、昔、大昔、ある所に、お爺さんとお婆さんが住んでいました。お

爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました(ここまできると、今までかたずをのんで聞いていた子供たちは「知っている」「挑太郎さんの話だ」と口々に言い出します。そこで、「そう、挑太郎さんのお話とそっくりだね。でも、これは、挑太郎さんのお話ではありません。これから違って来るから、よく聞いていてね」と言って、子供たちをなだめます。)

ある日のこと、お爺さんが柴刈りをしていると、柿の木に、赤い、大きな柿の実が成っているのが目に入りました。

お爺さんはそれを見ると、食べたくまりました。そこで、お爺さんは、

コ ラ ム

### 部首 構

棒をたてによこに交叉させ、組合せて物を形づくることを表した部首。

【構】 木を左右上下にさし渡し、組立てること。それで「構造」「構築」等と使う。

【講】 言(ことば)を組立てて、それを話し手から聞き手へとさし渡すこと。

木に登っていきました。

お爺さんの手が、もう少しで柿の実に届くというところで、柿の実が、ポターンと落ちてしまいました。そして、コロコロ、コロコロと下のほうへ転がっていきました。

お爺さんは、急いで木から降りて、「こらこら、柿や、待て待て」と言いながら、柿の実を追いかけ始めました。でも、お爺さんは、年取っていて、速く走れないので、とうとう、柿の実が見えなくなってしまいました。

お爺さんは、がっかりして、追いかけるのを止めて、おうちへ帰っていきました。

さて、お婆さんは、川で洗濯をすませ、うちへ帰って、お爺さんの帰りを待っていました。すると表の戸がコトンと音を立てました。「あ、きっとお爺さんのお帰りだよ。」

お婆さんは、「お爺さん、お帰りなさい」と言いながら、戸を開けました。ところが、そこにはお爺さんがいなくて、赤い、大きな柿の実が転がっていました。

「おや、まあ、こんな所に柿の実が。だれが持ってきてくれたんでし

ょうね」。お婆さんは、柿の実を拾って家に入り、お爺さんの帰るのを待っていました。

そこへ、「ただ今」と言ってお爺さんが帰ってきました。(中略)二人で仲良く二つに切って食べようとしますと、柿の実が真中から二つにパッと割れて、中から、かわいらしい赤ちゃんが生まれてきました。赤ちゃんは女の子でした。

柿から生れたので、柿子という名前を付けました。柿子はいくつになっても、生れた時より大きくなりませんでした。一寸くらいしかありませんでしたので、皆が“一寸柿子”と呼ぶようになりました。

お爺さんとお婆さんは、ある日、神様にお祈りしました。「どうぞ神様、うちの柿子を大きくしてください。」

すると、ある晩、夢の中に神様が現れて、「都へ行きなさい。都に一寸法師がいて、それが柿子を大きくしてくれるだろう」と教えてくれました。

年を取ったお爺さんとお婆さんにはとても遠い都までは、歩いていくことが出来ません。小さな柿子が歩いていくのは、なお大変です。三人は困ってしまいました。

そのうち、柿子ちゃんが、「私にいい考えがあります。お爺さん、私に風船を買ってきてください。お婆さんは、私に針を一本ください」と言いました。(中略)

柿子は風船に乗って、空高く上っていきました。風船は都に向かって飛んでいきます。空からの眺めはとてもきれいです。柿子ちゃんは、あっちこっち眺めて楽しんでいました。

そのうちに、空が曇って、雨が降り出しました。柿子ちゃんは、頭からビショ濡れになりました。雷がゴロゴロと鳴り出しました。それでも、柿子ちゃんは元気に都のほうへ向って飛んでいきました。

雨が止んで、お日様がニコニコ顔を出しました。きれいな虹が出ました。柿子ちゃんは虹の橋を越えて飛んでいきました。

ところが大変です。鳩が飛んで来たのです。柿子ちゃんは小さいので、鳩にひと口で食べられてしまいます。さあ、柿子ちゃんはどうしたでしょう。

柿子ちゃんは、お婆さんにもらった針で、鳩をチクリチクリと刺しました。鳩は「痛い、痛い」と言って逃げていってしまいました。(中略)

柿子ちゃんはとうとう都の空まで飛んで来ました。きれいな家がたく

さん見えます。柿子ちゃんは、風船の空気を少しずつ抜いて下に降りました。

(以下略)

お話の筋は、その時の思付きで、どう運んで行こうと、話し手の勝手です。しかし、本を読んで聞かせる場合とは違った変化が、幼児にとって大変な魅力となるのです。

### 時々質問する

子供たちの心を引着けるためには、時々質問をするのも良いと思います。「柿から生れた赤ちゃん、何という名前を付けたと思いますか」と

か。

また、「お婆さんが、お爺さんのお帰りだと思って戸を聞けると、お爺さんではなくて柿の実だった」という所で、「お婆さんは戸を開けました。ところが、そこにはお爺さんがいなくて……」と言って、そこでちょっと休み、子供たちの顔を「さあ、何だろう」というように見回しますと、いつも(たいてい)子供たちの中から「柿の実!!」という声が飛出します。

ころころ転がって行って、見えなくなってしまった柿の実が、ここに

再び登場してくることを、子供たちは期待しているのです。

物語から、柿の実が消えてしまったのですが、子供たちの頭の中には、ちゃんと残っていて、いつでも出てくるチャンスをねらっているのです。

子供たちは、ただ受身で、先生の話を受けているのではないこと

が、こういうところでよく判ります。いろいろ推理を働かせながら、時には話し手よりずっと先のほうまで進んで、「早く来ないかな」と言わんばかりに、待っている犬のように、先回りしているのです。

先生のお話をただ聞くというだけでなく、このように、推理しながら聞くというようになりますと、子供の頭の働きはすばらしく良くなると思えます。

こういう聞き方をすると子供は、全神経をお話に集中して聞いています。心が決してよそに外れたりなどしません。長い物語でも、決して飽きたような顔を見せません。

こういう子供に育てるためには、子供の一人一人に語り掛けるようなつもりで(事実、一人一人に顔を移して、子供の目をちゃんと見て話すようにします)話しますと、子供のほうもそれに必ず反応してきます。

落ち着いて、人の話を注意深く聞ける子供を育てるのは、先生の責任です。先生の、毎日の話し方の上手下手が、子供の“話を聞く態度”を作るのです。先生は“話し方”の工夫をすることに努力しなければなりません。

コラム



### 天は自ら助くる者を助く

他人の助けなど当てにせず、自分の力で道を切り開いて行こうとする者には、自然と道が開かれ、成功するものだということ。アメリカの独立戦争時に活躍したフランクリンが、好んで口にした言葉。

自

且

力

【天】 人が両手両足を広げた“大”に“一”を加えた字で、“頭のてっぺん”のこと。

天